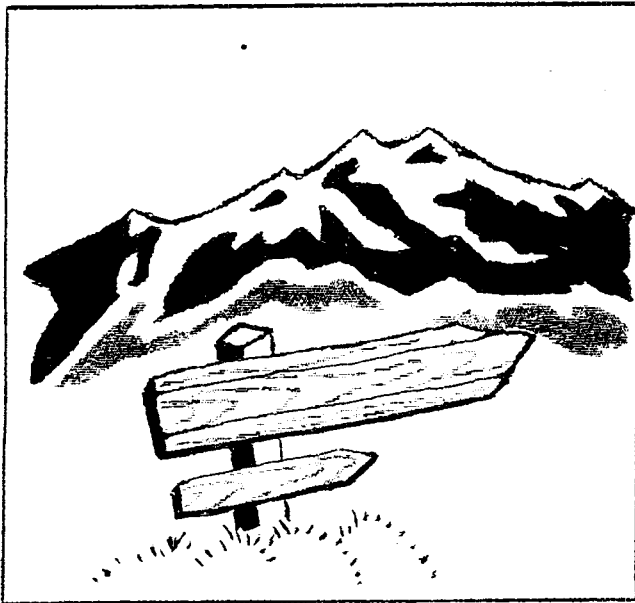


西册 *Tourenbericht*



6

都立西高OB山岳会

第三年度の目指すもの

たなかまさとし

◎我々の会が都立西高を誇りとするが故の結果であることは勿論である。

西高山岳部OB会が設立されたのは昭和廿五年の九月と記憶する。それが翌二十六年十月に早くも解体、志願制度の入会としNACとして発足した訳である。しかるに主目的が西高山岳部の親睦のみにあつたためか、当時の常として山に求めるもののみならず、兼ね合体であり、実行力のない頭デッカチのOB会であつたのに対し、いさゝか不満を帯つた我々は、腰の浮ついたハイキング派とは手を切り、互の長所を主かすべくNACの一員としての西朋登高会の結束を真剣に考え、二十八年四月一日その設立を実現したのだった。我々の目指すものは専ら登山としての山でなく、意欲的な登攀の實踐並びに西高山岳部の正統的指導にある。我々の会の生命は若さと情熱にある。NAC主流の爺むさゝの排除にある。

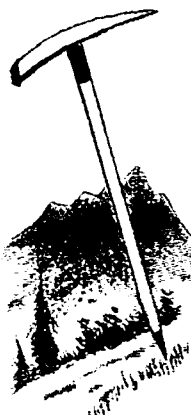
(1) だが待て、第二年の山行を顧みて、若さがあつたであろうか。情熱は燃えたらうか。少くとも入会に先立つて会の主義を伝えた者である。忘れたとは云わせない。会費が果つてから会の目的を決するのではない、我会に於いては発会に先立つて旗幟は決してある者である。そして志を同じうする者のみが、西朋の旗のもと馳参じたのではないのか。入会を誤つたと思う者は去れ、NAC主流がある。例え残る者が五人、十人でも良い、永遠の兄弟、姉妹として血を介し合ひ、紅蓮の情熱で首を組もう。第三年度に目

指すもの……それは新たなものにあらず、旗幟再認識と云う前進である。

◎我々の兄弟、それは社会人あり大学生あり浪人あり、各々その社会環境を異にしている。西高生当時の如く一律の山行を行わんとすることは明らかに許されぬ問題である。技術的に見ても各人名譽である。会の運営は実にむづかしい。第一に今年度前半期に於いて、会の空気の確立、第二に同じく基本力の確立を目標とするつもりである。

意欲的な登攀を何も穂高とか谷川のみに考えを巡らす必要はない。各人の経済的、時間的に許される範囲内で、自己のフロンティアラインを意欲的に一歩一歩押進める事である。対照は人によって異なる事は当然であろう。高尾山であろうと御岳山であろうとスポーツアルピニズムの實踐には対象となり得ることは勿論である。年に廿回山に入る者も居るだろうが、率情が許さず一、二回の者もあろう。そんな事はどうでも良い。要は一人一人の若さにある。山に行けなくとも、月一回の集会で楽しく友の手柄語でも聞こうではないか。ともかく爺くさいのだけは、こめんなのだ。

(一九五五・四二〇)



19 万座温泉スキー合宿

コーチ 岩井富士雄先生(旧姓三好)

CL 平沢勇 SL 山口雄弘 世田英次

M 長崎正躬 赤沢拓治 鈴木輝夫 成瀬泰雄 山中富

佐子 岩崎元子 福田宏二郎 佐藤信治 松田朝夫

小田尚於 米野弘躬

西高現役 京田守弘 松田稔 田辺克之助 高山一彦

北村護行 他 黒川秀子 計21名

12月31日 山口 森沢 長崎万座入り

1月1日 鈴木 米野 山中 黒川万座入り

1月2日

先発の我々は今日草津より来る本隊を迎えに行くべく大和屋を出発弓池に向った。弓池に漸くと本隊は既に着いていて逆に我々が迎えられる様な結果になった。ここで隊を二つに分けて下る事に決め私は先発として下る事になった。奥徑を下るのであるから仲々の難事である。無事に宿につき後発を待つて居た所仲々来ず。日は暮れるし気温は下って来るし心配になったが大した事はあるまいと思つうちにN・Mが騒ぎ出したので最後には番頭にも迎えに行つてもらふ様な結果になった。福田はスキーを折った為凍傷になったが他は事故なかった。

1月3日

全員で松屋ウラのゲレンデにて直滑降をやりフラスを二つに分ける。次いで全、半制動、ボーゲンを練習。虎に自信のあるものはクリスチヤニアに入る。昼食後は常盤屋裏にてボーゲンを練習。夜は検討会を開いた。

1月4日

今日は平沢、山中、米野、長崎の帰る日だ。世田、小田、松田、鈴木の四人弓池迄送つて行く。今日は冬道を初めて通る。途中で果パーティを超越してラッセルを交代する。今日は全く良い天気。はるか彼方には北アが美しい。四阿山、猫岳も近く見える。

お釜はエメラルドグリーンに水をたたえてとてもきれいだった。記念写真を写した後ヒュツテの所で左右に分れる。柱路を横転、逆転、燕返し、トンホ返し等秘術を尽しながら滑るうちゲレンデ着。岩井先生着

1月5日

今日は先生のコーチで制動練習。一方では瀬門を作りクリスチヤニアの練習をしている。明日は下山かと思つとがっかりだ。昼食の時万座ゴチャなるものが出現して皆を驚かせた。夕食后コンパが開かれ全員唱歌、珍歌を歌い又汁粉等はアンコー歩手前でさすがの強者も一杯で降参すると云う笑えぬ悲劇もあり仲々楽しかった。

1月6日

今までの晴天と打つて変つて今日は雪である。希望者は万座峠より山田温泉に下り残り全員は弓池より草津に向い家路についた。(鈴木輝夫記す)

21 第二次八ツ岳西面合宿



一 概要

我会発足以来丸二年を至過して居ながら何ら記録的に見るべきものなく、平均年令二十才にありながら、鈍むささから脱し切れないでいるのは何故か。基本技術の練磨不足にある。中途半端なリーダーが多かつたのも此所に基因している。五日間の短日程ではあるが、ヒツケル、アイゼン、サイル等の諸技術をた、ま込み参加者全員を精銳化する一方、赤岳西壁中央ルンセの記録を獲得する事に目的を重点化した。高松山岳部並の計画ではあるが、一般的に見て今年のハツ岳は雪が少く行者附近で約二米、その上アブノーマルな暖気の吹込みで充分な訓練を行う條件がそろわず、行動不足、計画一部挫折の感があつたが、雪山に関する認識を新たにし得たのではないだろうか。概して古参者にねばりと斗志がなかつたのには裏切られた様な感あり、ハツ岳と云う小規模の山に自己を随することなく、希望の明星を目指し、めぐり来る冬山で三千米の稜線の攻撃展開を約し、以下此の基本合宿を報告する次第である。

計画 3/30 全員行者小屋附近BC建設

3/31 赤岳登頂 氷雪上のビレイ訓練

4/1 一隊主稜にAC建設、二隊阿弥陀北稜、三隊赤

二 編成

4/2 岳西壁攻撃
一隊ACより権現岳登頂、二、三隊硫黄岳登頂

4/3 AC撤収サポート
BC撤収

C	L	田中	将利	21
S	L	田中	実	21
S	L	平沢	勇	21
(記録係)		鈴木	輝夫	21
(器具係)		福田	宏二郎	19
(食料係)		松田	朝夫	21
		町田	明	22
		林	武志	19
第一隊		平沢	鈴木	松田
第二隊		田中(実)	町田	林
第三隊		田中(将)	福田	
三		行動報告		

三月廿日(晴小雪)
泉聖(七〇〇、七四五) — 美濃戸(一三二五、一三三〇) — 行者平BC(一七〇〇)

汽車の中で乗じられた両も晴れ上り太陽は我々の山行を祝福するかの様に輝いている。泉聖で津備をすっかり終えた我々は今日の目的地行者小屋に向つて出発した。ハツ岳特有の裾野の美しさ

と、しごき音の妙なコントラストを満喫しつつ、我々は二股に着いた。日蔭には雪が見られた。夏い荷に喘ぎつゝ、登る内SとMが御慮恣になり空身とする。中ノ行者をすぎると頃より雪は深くなり、歩行は困難となり加えて雪が舞い出したが小屋もすぐだと思いかンバル。小屋上二十米位の地点に設営したが、良かった天気もどこへやら雪が音もなく我々のテントに降り積って行つた。

(ラジユース不調のため夕食は十一時半)

三月三十一日(風雪后ガス六時零下の五度)

赤岳登頂

BC(一三・二五)——中赤コル(一三・〇〇)——赤岳(一四・〇

五)——一四・二五)——中岳コル(一五・〇〇)——BC(一五・

五)

朝起ると雪と風の音がする。吹流しより外を見るとものすごいガス、雪も相当降っているので昼迄様子を見ることにし食糧の配を行ふ。昼近く雪は止み風こそあるがガスも薄くなったので赤岳に登る事に決意大急ぎでカンパンをかじり外へ出る。昨夜の雪で出来た樹氷が美しい。BCを出発中岳沢を登り二股でガラーを操る。左股に入りしばらく行くと急に急になる。表層雪崩らしきもののがあとがあり雪崩に注意しつつ、どなられながら中岳コルに立つ。一般化した後赤岳に向う。立場奥壁上部をトラバース堅雪面に胆をひやしつゝ、頂上に立つ。記念写真を撮り急いで往路を下る。途中アイゼンテクニクを練習した。中岳コルからは滑台よろしく滑り十五分と云う記録でBCに到着した。(鈴木記)

四月一日(風雪后ガス AM六時二度)

◆第一隊(平沢、鈴木、松田) AC建設

BC(一三・三〇)——稜線AC建設(一六・三〇)

私は今日、リーダーとしての能力を疑われても仕方無い様な三つの失敗をしてしまった。それは、夏道尾根を左へ二本も取り違えたこと、ルートを誤つてパーティーに異常な労力を強いた弱身からAMにラツセルの練習をさせる任を怠つたこと、天幕で不覚にも食血を起して倒れたこと……なのだが、その委細は次の通りである。

前夜赤雪だったが、積雪約一〇mで下層とは完全に分離しているし、風も相当強かつたので湿潤表層の出る可能性を思つて午前中は停滞した。あたり一面はミルクの様に見えるガスだった。

C1の意見では、1-2隊行動を共にする様にこのことだった。併し、当会にとつて稜線に天幕を張るのは初めてのことで、それだけでも幾分意味があるし、生活範囲を広くして行動の可能性を大にすると云う経験をするのは、限られた機会を憚た今として必要である。東京での計画を遂行するのは第一義に大切である等々考え、気象条件も左程悪い方ではないので、決行すべしと自分に命じたのだつた。

さて、昼食后2-3隊を見送り、我々も強引に出た。が、森林帯で私がオゾイのは定評のあるところ、期待を裏切らず、たちまち迷ってしまった。尤も自覚症状が無かつたわけではないのだが、一昨年来た時の記憶を信用したのがいけなかつたらしい。一見し

て見覚えのない処であることは分った。併し打スで全然視界が利かないと云う事実があつた。そこで私の迷んだ方法は、遠裏に遠うか、運われないのか自信が持たれるまで実験的登高をすることだつた。

午前中の停滯で気が抜けたのか、皆景初からあまり元気がなかつたが、行先の知れない登高と云うものはフアイトの減少を保つものであるらしく、三回目の実験にかゝつた頃はS等ほとんど歩く気が無くなつていた様に覺受けられた。気の弱い私に許されたのは、自分でラッセルを流けることなのである。心配していた地脈下の雪の斜面、針金のあるトラバースが表層の出た跡で反つて容易になつていたのは幸だつた。

通常ならば二時間足らずで登るべき尾根に四時間を費して疲弊に到し石壁横に天幕を張つたが、風が北面から相当強く吹いていたので三人で張るのは相当困難を感じた。先ず、Sを天幕に入れMと棟までブロッツを積んだ。

さて全員天幕に入り飯を炊き終つてから、私が食血を起し、Mの言によれば二時間程死んだと云う事件が起つたのだが、剣れた際にラジウスを剣したらしく、気がついた時には全員ガス中毒にやられていて一時は大変な騒ぎとなつた。飯を済ませて寝に就いたのは十一時頃だつたらうか……(平沢記)

◆第二隊(ミノル・野田・林) 阿弥陀岳登頂

BC発(十三三〇)——中岳阿弥陀コル(一三三〇)——三三五
——阿弥陀嶽(一三五五)——一四一〇)——中阿コル(一四三三)

——BC

編隊行動の第一日は、昨夜来の積雪で圧迫された天幕の中に目をさました。気温はプラス二度、雪はさかんと降りしきる。風こそ弱いガスは濃い。九時一旦出発にかからんとしたが躊躇し、結局各隊今日の行動を最小限にして、十二時半全員BCを出る事に決つた。昨日のラッセルをたどつて二・三隊共に出発した。途中三隊は赤岳山壁に向うべく森林帯の中にその姿を消していった。積雪は十五極ほどに終つているが、雪質はえらく悪い。

昨夜から気温はマイナスに下らず、現在おそらく五度を出ている事だろう。救坂のピッチでアイセンは高下駄と化す。ラッセルをくぼみ(沢筋)にとり、右岸にとり又左岸にとつても何等雪の状態に変化はなく、高度を増しても、逆にラッセルが深くなる始末である。しかもこゝにはめすらしいスノーボールが方々に落ちてゐる。昨日は雪面約一尺五寸の辺りに堅いフラスト面があつたはずなのに今日のラッセルはたまたま履までも許さない。コル近く小さなテブリを右に巻き過ぎてガスの為道路に戸迷うも事無くコルに達した。隙線の風雪を予期していた我々であつたが、ほとんど風が無い。中岳への稜線は諏訪側はかなり不気味な雪庇を出している。一服して阿弥陀に向つた。この稜線、岩稜の露出によるアイスバーンを予期していたが異常なほどの温暖の爲か、雪が深いところは、相変らずのラッセルであり、岩の露出している部分には水が流れている有様で、ほとんど心配も無く、コルから三十分で頂上に立つた。視界とて見るべきすべもなく、頂上の雪庇を

風よけに一本の新生を介けて吸った。アプローチから眺めた勇姿も、今日その上に来てみるとすっかり黙り込んだ。

「ガスさえなければ」と云う我々の言葉に同調しているかの様である。早々に引返すべく、トツプで下っていった。コルで中岳往復を考えていると声がした。近くに居るのだろうかと思啓してから風の便りだろうとあきらめた。雪質は全く危険そのものであるが私はハッ楯の雪崩の恐ろしさは少しも知らない。五分ほど下ると又声がした。とたん両者に声が通じた。「急いで下れ」と、どなっている。人が見え、濃いガスの中に第三隊が見えた。雪崩をみたか、心配した。危険だ、と応答しながら彼岸の地点にたどりついた。と、その時「逃げる！ かけ上れ！」と田中（寿）がどなった。瞬間かり向くと積乱雲が雪面をほうばりに落ちてくる。ラッセル上に居るラストのHに十米ほどの所まで迫っている。続いて見直した時静かに止っていた。あたかも何でもない様な顔をしてバラ／＼になったパーテイは雪崩の進路から遠ざかり左斜面高く下降ラッセルを急いだ。みると中岳から落ちた大きなテブリは往路のラッセルを三十米にわたって消していた。危懼に迫られ、戦慄に迫られた今日の神圣に高いツガの木から、水しずくが止めとなく落ちていた。(ミノル記)

◆ 第三隊 (狩利・福田) 赤岳西壁偵察

赤岳沢をつめ壁へ直接取付こうと、それと思う沢に入る。しかし途中で沢が複雑となり、加えてガスで視界奪のため、ルートのも確認が困難となったので左殿との中間鞍に取付く。気温が高いの

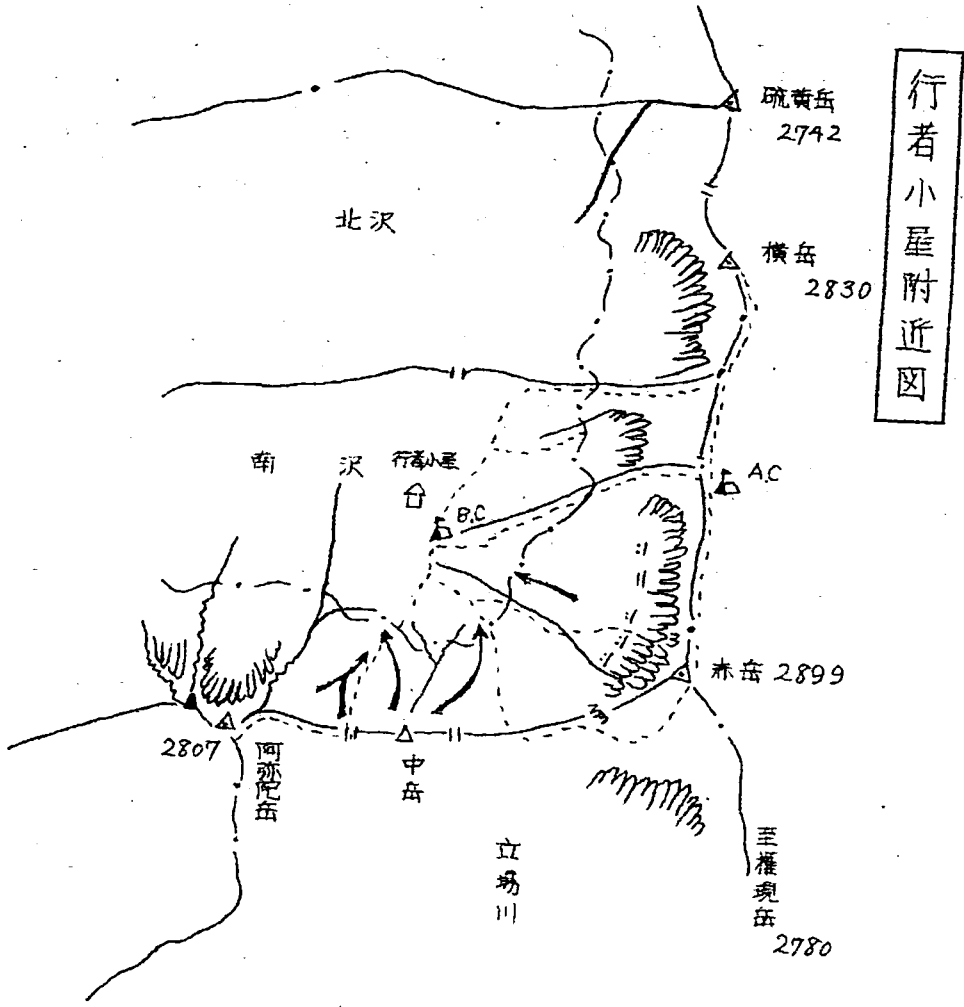
でフスフス腰までもぐる。森林限界を突破しようやく雪で悩まされることなくなつたようなものだが、ガスのため、何しに登って来たか分らない有様である。しばらくして、ガスの切目より尾根の左手に、西壁が、また、かすかではあるが、アイス、フォールも認められる。尾根のコブ状の所でボロ／＼のフェースに突当り右よりノーザイルのま、水面を力ツティングしつゝ登る。風が強く、寒気が骨髄を穿とる。西壁の各ルンゼはブロックと氷塊の落下音がすさまじい。視界奪、長居は無用である。下りは実に早い。アツと云うまに二殿へ下る。そして第二隊の帰路のラッセルがないので迎えに行こうと、今度は右殿を登り出す。

や、登って中岳よりのテブリを発見、瞬間ギクツとするも、テブリの上端にもラッセルを発見、まずは安心する。しかし危険性は大きい。第二隊に急を告げんと、急ピツチに登る。やゝして、下降して来る第二隊に会う。まずは全員無事であることを喜び、いそいで谷を下らんとした時、ガスの中より、音もなくナダレの舌尻が接近して来た。「逃げる！！」とはかり、各人、山側の斜面にとりつく。幸運にも、ナダレは我々の眼前でSTOP、止まらなかつたら、林あたり犠牲になつていたらう。一隊の安否を気遣いながらかけるようにして、BCへ帰る。(福田記)

四月二日 (晴后高曇 六時零下二度)

◆ 第一隊 (A.C. 隊) 横岳登頂

出発 (〇八〇〇) — 赤岳 (〇八三〇 — 五〇) 天幕 (〇九二〇 — 一一二〇) — 横岳 (二隊と合流) 二二二五 — 五〇 —



行者小屋附近図

- Route
- 4.1 Lawine
- Timber line

天幕(一三三五)三隊と合流後撤収

今日も主観い妙な天候で、吾心して積んだブロックが大半溶け落ちていたのはがっかりした。

赤岳へ向ったが、皆のファイトのないことは昨日に及らず、ラッセルに入って遅れる有様なのである。時間とSの調子から推してキレット迄も無理だと判断して、権現を中止したが、天幕を張った意気はなくなってしまうのは仕方がない。

ガスも晴れ、写真日和となった。南峰で新しく三三隊と連絡してみたが、二隊の音が聞こえたような気がした。

二隊と会ってから行動を決めようと再び決心して急いで帰幕、S・Mを天幕に宿し、二隊との連絡に出た。心配した通り二隊は昨日の我々のラッセルに惑わされたらしいが、横岳の一峰の下に出て来た。突と握手、一日見なかつただけだが、一応再会の喜びだ。相談の結果横岳且行くことにし、二隊に先行してもらい、天幕へ引返し、炭飯を整理した後出発、Mを心配してオーターはS・MHとする。

相当悪い処がある様に本で読んでいたのが別段驚かす様な箇所もなく、二隊のステップの跡を歩かせて頂いた。

ヘケ岳は小さくまとまっているのが特長だと思っていたが、横岳へ来てその感を新にした。実際積雪の様な小さなピークが既合よく、鋭きもせずに残っているのである。

本峰にて二隊と合流、硫黄を見ると何だか阿の様な処だ。行っても意味が無いから止めたのだと云うが尤もなこと、思った。

昼食後引返す。赤岳の上に西壁を登った三隊が望まれた。

一峰のトラベースで、つまらないところでMがスリッパし一寸頭に来たが、事故と云う程のことでもなく、ますます無事に帰幕した。

権現には行けなかつたが、横岳へ行っただけでもいくらかは債にはなつたろうと安心した次第である。(平沢記)

◆第二隊(突、町田)林は下山

横岳登頂

BC発(八三〇)——霞線鉄走路(一〇〇五〇—一〇二〇)——

横岳主峰(一一三五—一二五〇)——赤岳石室(AC撤収)

(一三五五—一四二〇)——BC帰着(一五〇〇)

起床時既に目をさましたものがないという不出来である。昨日の突発事で、横岳に送った第一隊が気になる程でもあった。気置は期待したほど下らず、マイナスイ度をしめている。天幕前で三隊を西壁に送って右と左に別れていった。Hが下山したためラッセルを分け合う二人である。空は西ばかりが晴れ上り、遠く赤岳は絶好のアタック日和である。薄いガスが横岳、赤岳、阿弥陀のピークだけをおくって残すは息まれた天候と思われる。ところで、昨日の第一隊のラッセルに入って歩いた我々は、妙な場所に出会った。馬鹿に目立つ赤布がぶら下ってラッセルの跡が十字路についている。は、こ、こ、で元すやられたなど思っ込んで迷込んだ尾根も我々がやられているのである。BCから四十分我々も又、行きづまりに苦笑した。雪玉が出る程尾根がやせこけてしまい、右手

に岩壁が現われた。重荷の一隊はこの地点から引返せざるを得なくなつたのであらうアイゼンの跡が下に向つてかなり急いでいる。景道尾根から一本北に寄つた無名尾根である。三隊に二間直上と連絡を榮して行手をとつた。九時十五分、本陽は未だ稜線上に出て来ない。ラッセルも、ひざかせいぜいである。岩稜を擡つて左にトラバースし灌木が縮く尾根を選んだ。傾斜こそあるが適度の積雪と灌木で、怖るゝに足らない。約百五十米ではい松まじりの岩液に出た。傾斜はゆるく、冬だけの径もやがて終りに近い。面壁にしがみついた三隊と、赤玉を下る一隊の全員懇事が小さな姿と天に叫び声で奪せられた。横岳の岩壁にルートを標し右にトラバースすると、あとがすぐ稜線に出た。懸まれた天険状態であつたからこそ、誠に採取、無名尾根でもあつた訣である。平沢を呼び寄せ、一隊に迂行して残隊を横岳へ取つた。昨日のデブリへの意識が、不思議に急ぐ横岳第一峰へのルートは變更せざるを得ない。第二峰の左登きはなかなかシヨッパイ。だがすつかり明れ上つた三百六十度の展望は、山に登り得る者のみの持杖ではなからうか。時間的にギリギリの線にあつた我々は疏費行きをあきらめて主峰で昼食をとりつゝ、第一隊を待たせ、名知らぬ鳥が思わぬ客に、悪い切り舞つてみせる。無事な時間をつぶした我々は一隊と共に主峰を引返した。石室横の一隊の幕営にはすでに登車を終了した三隊が湯をわかつて待つていた。二日間だけと、それだいて又しぶりにもみえる全員との再会である。早々に撤収し景道尾根に降路をとつた。雲こそあるが天候は元々元々良好である。

地蔵原下の急傾斜にスノーボールが落ち、わつと抜いた足が又深くもぐつてしまふ。

この孤立した火山群は静まり、しかも落着きはらつた春安を並べている。こんなに小さい山群を今日も迎えて。(実記)

四月三日(降雪) AM六時零二分(夜)

天群撤収(〇・八〇〇)―出發(〇九二五)―美濃戸(一〇・三

五)―泉壁(一三三〇)―帰京

今朝も雲だ。撤収する事を考えると嬉しいのやらガツカリしてよいのやらわからない。

ともかくも撤収出発。悲鳴をあげながら登つて来た道を元氣よく下る。降りしきる雪の中をとばすうちに美濃戸二股についた。まずは一服と荷を下す。

今度はすごい道だ。今こそみせれが降っているが、昨夜は雨だつたのだろう。ゆるい下り坂だから重力加速度はいくらもないのに皆の足はすごく早い。誰か?に会いたい一心なのかもしれない。鳴岩橋で昼食を食べる。

昼食もそこへに出発。バスにぎりぐりの時間なのでとはす。足の裏にマメが出来て痛い。泉野に着くとバスに二十分時間があつた。

茅野を二時三十分の中央銀嶺に乗り家路に着いた。五日朝我々を懷に抱いてくれた山を望みつゝ。(鈴木記)

四. 器具

その他	器具	天幕
ラジユース(附属品付) バーナー コッフエル 小鍋 鉋 スコップ マットレス シュラフサック	補助ザイルニ〇米 ハンマー アイスバイル カラビナ マウエルハークン アイスハーケン	ナイロン冬用四人天幕 パーバリー夏用四人天幕 ブランドシート
8 5 1 2 2 2 1 2	1 16 7 1 2 1 2 1	1 1 1

五. 燃料

石油	ニガロン
タ	二〇〇本
携	五丁
ローソク	二〇本

六. 食糧

副食	主食
コンビーフ ソーセイジ パター チーズ 黄名粉 佃煮 野菜	米 即席餅 パン 乾パン カルゲット
ニケ 四本 半ポンド	六・五升 九升 一六ケ 一・五黄 五本
その他	副食
ソース 夏みかん 砂糖 味噌 たくあん	陰摩塲 ガンモドキ めざし かりかけ 若干 ニ本
その他 区 するめ・ド ロップ マカロニ ココア	一五〇奴 六枚 七〇尾 三〇〇奴 二〇〇奴 四ケ 一本

その他

温度計
カメラ
その他炊事用具

式 3 1

七、雪崩に關して

我々のハツ岳狂騒といつても極く浅いもので、無雪期ハツ岳のそれは皆無であり、まして積雪期に於ける雪崩に關しては言及するの資格を持たないのであるが、ハツ岳西面に關する限り我々は雪崩の危険性について無視して居た事は事実であつた。

又従來の記録を見ても小ブロッツの落下程度の記事のみに終つてゐる。一昨年と同じく四月上旬におとすれた時も、阿弥死岳北稜登攀中峭壁上部の雪面が絃い音と共にすり動いたのを目撃し、又気温の急上昇に伴い小同心ルンゼに間断なくブロッツの落下するのにも出喰したものであつた。しかしこれらは全く局部的なブロッツであつて雪崩とは少々異つて居たことは勿論である。

今年は三月下旬より異例的な停滞前線が本邦をお、い梅雨型の天候が続いた。これによつて山稜近い雪は大部分溶解に入つたのが、夜間凍結し急速に雪質はしまつて來た。三〇日頃がこの様相

を呈していたものと思われる。三〇日夕刻より吹き出したS Wの風雪は、中岳稜線北面に約一尺近い積雪を見るに至つた。三一日赤岳に向う途中左腹にて乾燥表層の小塊積なのを發見したが、それ程危険は感ぜられなかつた。この頃より気温上昇著しく一向天気は落つく様子なく一日に亘つても濕雪は降りつゞき、一日午後各隊出発してより上部に登るにつれて雪の不安定なのに驚き、計畵中止を伝えるべく三隊は二隊の後を追つた。が、不安定な中岳北面及赤岳西壁の雪面のバランスがくずれ右腹に於いては中岳頂上附近及阿弥死岳南壁北稜基部より崩状に雪崩が發生した。山自体が猶殘存存在であつたので大事に至らなかつたもの、崩の發附近に偶然居た我々にとつては、零凍界の世界から音なく滑り來る濕潤表層雪崩には恐怖めいたものを感じた。この程度の雪崩なら、極高なら毎日のことであり驚かないが、予期しなかつた「ハツ岳」であるが故に今後の記録として記して置きたい。(田中)

赤岳西壁中央リンネ登攀

P 田中 特利 福田 宏三郎

期日 四月二日 晴后ガス AM六時零度

装備 ザイル三〇米、アイズバイル 1、ハンマー 1、

アイズハーケン 1、マウエルハーケン 16、カラビナ

7、食糧 二食分(他ピッケル、アイゼン、ヴァイントヤ

ット、ヴァインドホーゼン、オーバーシュー、毛皮手袋等

着)

BC(ハ三〇)―F―アンザイレン(九四〇、九四五)―赤

岳(一二二五、一二四〇)―A.C(一二二五〇)

雪深いタンネの森を一日から 暗くお、つて居たすつたるい
ガスが俄かに切れはじめ、主稜がそして赤岳、横岳の並立する男
性的なフェースが薄頭の乳白色の中に彷彿と浮び出した。好機到
来、中岳沢二股より赤岳沢との中間稜に取付く。湿雪の薄氷まで
落ちるラツセルは血をほく思いた、森林限界まで十五分の急ピツ
チ。コブに達し一二隊とエール交換が始まる。仰ぎ見る赤岳の西
壁は赤黒く碧空に一練を画してなで落ちて居る。コブ上部のリツ
シは昨日のステップを切りなおして登り最初の氷瀑の下に達しア
ンザイレンする。まず四ピッチはシーソーでアイズフォールを右
に掻き気味に約五〇度の堅雪面をキックして登り小氷瀑上部のヴ
エルグラ面をトラバースし、三〇米マキシマム四ピッチ一二〇米
で二本目のリッチ即ちF―直上に達した。

確実なレッヂなく不安定なナイフに兩乗りになつて確保するラ

ストを後に、田中トップでスタカットに移る。ヴェルグラされた

ナイフリッチを更に快適にニピッチ直上、小ハンクに直面、未だ

「光り物」を使用する気にもならず右側ルンゼ内のアイズバーン

にピッケルを振りながら掻き込みリッチにもどるも再びハンクに

遭遇。リッチ上は垂直約五十米の岩塔が霧氷に穿をまとい立は、

かり左の中央リンネは柔いクローアル状に下2の氷瀑を懸けて

いる。トップ上部より確保の上、ラスト福田、左側ルンゼに向つ

て雪壁をトラバース、トップ直下二〇米にてバケツを振り持機。

更にラストを支点としてトップ田中アイズフォールを目かけて行

動開始、三〇米いっばいにて岩塔基部に達し最初のハーケンをた

たき込む。ニピッチ目クローアル中央に突入、蒼水をカッティ

ングしつ、一歩一歩慎重に登る。上部の氷面は陽をあげてキラギ

ラと輝いている。頂上も霧氷の鏡に身をかけたためたあの岩塔には、

まれて見えず、たゞ鉤くまでも深い碧空と一筋のステップ。思い

出した棘にのびるザイル。時折金属音を生じて飛来する氷片の流

下には飽の子の様に首をすくめながら……ステップ、バイステップ、

冷峻なる氷雪と灼熱せる情熱の斗争あるのみ。二十米にてクロー

アル最後部に達しハーケンが美しいハーモニを岩壁にかなで

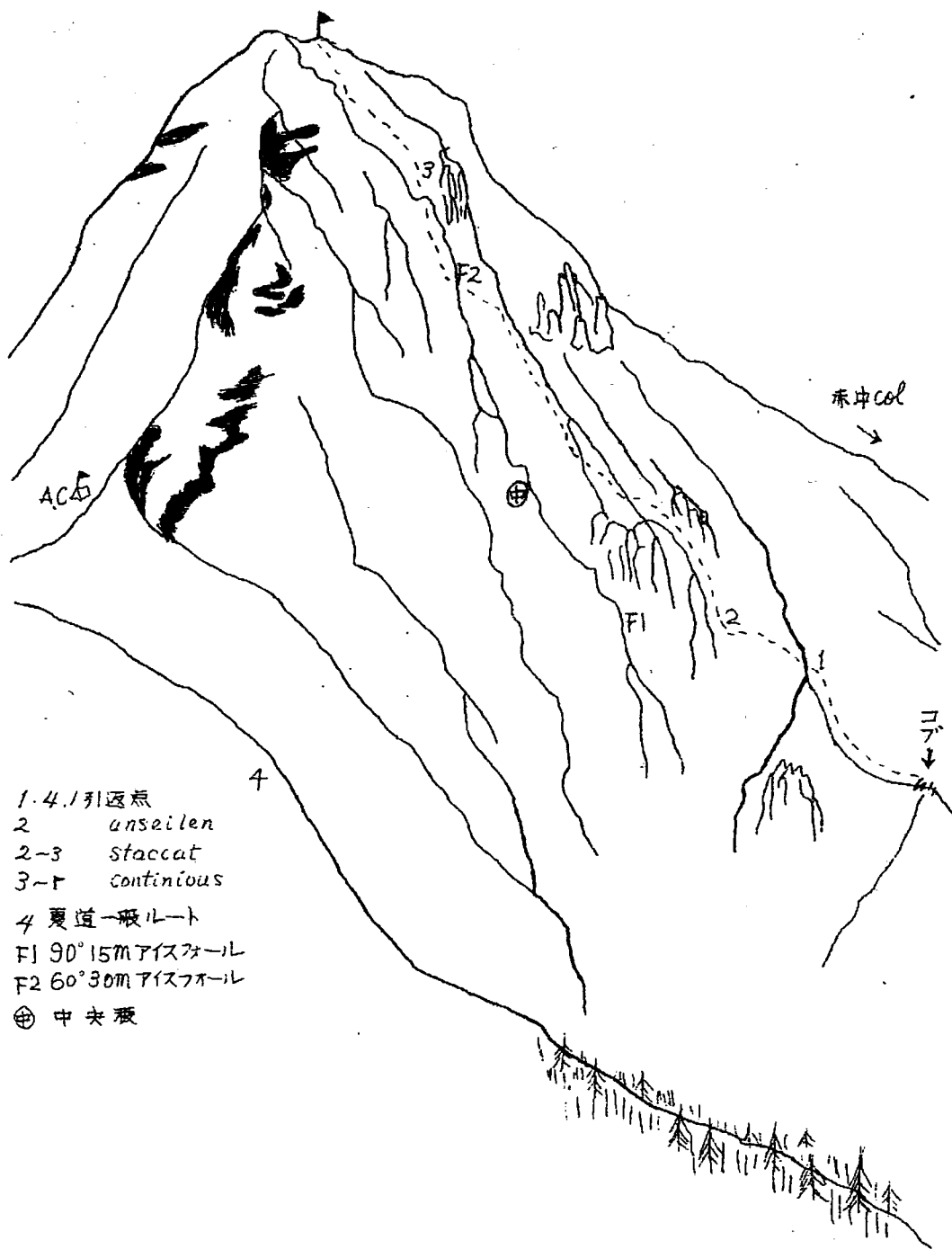
る。や、傾斜の落ちた9ピッチ目は逆光をあげて、ピッケルの一撃

くの下から七色の氷片が、紺碧の天空に消えて行った。更に上

(13)

八ッ岳赤岳西壁ルート図

1955.4.2 Party 田中特利 福田宏二郎



- 1. 4.1 引返点
- 2 unseilen
- 2-3 staccat
- 3-4 continious
- 4 夏道一般ルート
- F1 90° 15m アイスフォール
- F2 60° 30m アイスフォール
- ⊕ 中央稜

ピッチでフーロアールに崩れを告げ左下から直い上つて来る巾着
 トラバースバンドにとび出した。在状節理の北峰の岩肌も、白
 銀の南峰の柔肌も手がとぎそうだ。口舌が流れる日付ピッチ目
 のスノーリッジをシャフトでたたき落し、まはゆいばかりに反射
 する雪面を約百米コンティニューアスのま、南峰三角点に駆け登り
 セカンドの大任を果した福田と先ず無言の握手、そしてニタツ、
 北峰で覆まわしの如きザイルをとぎ三ツ道具をしまい横岳の山頂
 に現れた野郎共と完登の喜びを伝えようとピッケルを幾度も打振
 りながらアドヴァンスへと馳せ下つて行つた。

〔註〕技術的に困難を感じる様な悪場はなかつたが二・三日來の
 デリケートな雪質に対しては最大の注意を拂つた。殊にフーロア
 ールの箇所はブロックの落下を喰うと逃場がないだけに確保地点
 の獲得には慎重を期した。岩は脆く脆弱であつたが上部
 程氷によってコンクリートされていて辛であつた。壁全体として
 の平均傾斜は五十度強位で、まともにはなく中央後にしても頗く
 程手強くは見受けられない。あまり短時間なので我ながら驚いた
 次第、ハーケンは今セルフビレイに用い五本を使用したのみで
 あつた。(一九五五・四・一二田中記)

山行計画

24 日原唐松谷

係 平沢

五月二十八日(土)夜晩——日原ヒユツテ(半泊)二十九日

(日)唐松谷——鴨沢

申込メ切 五月二十五日

25 丹沢寄沢又は助七沢 係 田中(将)

六月十二日(日)午前六時 小田急(新宿)開札口乗合

26 上越國境縦走 係 田中(史)

六月十八日〜十九日(十七日夜行発)

土合——西黒沢——谷川岳——毛沢沢乗越小舎(泊)——仏

倉山——三回峠——法師温泉(バ)後照

申込メ切 六月十一日(土)

会務報告

一 稟会報告

○リーダー会 四月六日 PM五時

於 *Coffee de Stanton*

出席 田中(将)・田中(史)・平沢 他鈴木

○第三年度総会

四月十日(日)於山口君宅 PM二時

出席 田中 平沢 山口 鈴木 笹田 松田 山中 加藤

伊藤 岩崎 龜山 小田 長崎 岩波 森沢 田本

町田 渡辺 見里 林 岡谷 23名

1 前年度決算報告 中野

2 本年度運営方針及正会員推せん 田中(マ)

3 本年度山行方針
4 本年度予算発表

田中(三)
平沢

5 遺贈対策基金に関する件

純会費中より本年度分として二千円積立てる一方、毎月一人十円、山行一回毎に十円積立てることに決案

二、第三年度役員を左の通りとする。主なる積雪期山庄左の通り
代表・田中利利(一九三三・一一生)

富士三回 穂高三回 飯三回 白駒二回 五蓮一回 ハッ岳二回 秩父二回

千一フリーダー 田中実(一九三三・七生)

ハッ岳三回 鹿島槍ヶ岳 秩父各一回

フリーダー、会計 平沢勇(一九三四・三生)

ハッ岳二回 飯岳二回 白駒二回 穂高、五蓮、富士各一回
フリーダー、巻貝 福田宏二郎(一九三五生)

仙丈岳 ハッ岳 秩父各一回

他の山岳会に比して年令的にも山庄も若く高校を卒業したばかりの団体でもあり 謙虚な気持ちでこの后さを誇って、新なる前進に邁進して行くつもりであります。

三、会員移動

○住所変更

川山口雄弘 武蔵野市吉祥寺二〇〇二 TEL 武蔵野五八七
〇一月九日付入会許可

22 小田尚於 29 平 中大経済学部中野区上野原町五

23 米野弘躬 29 平 杉並区大宮前六ノ四〇一
〇四月一日付入会許可

24 町田 明 27 平 早大法学部 杉並区天沼三ノ五八七

(39) 七〇四

25 林 武志 29 平 慶工大 武蔵野市吉祥寺四七八

26 里見朝規 27 平 早大法学部 杉並区天沼三ノ六〇四

27 渡辺 亨 27 平 白大医学部 杉並区天沼二ノ三五六

28 関谷 敬 29 平 杉並区下高井戸四ノ九六三

(39) 七九〇五

第二年度收支決算報告
(一九五四年(一九五五・三))

支出		収入	
通信文通費	765-	前年度繰越金	2450-
会費発行費	2,600-	純会費	11,400-
トランプ費	380-		
器具購入費	7,675-		
印紙及雑費	120-		
出校費	1,100-		
小計	12,640-	小計	13,850-
		差引残高	1,210-

会計 中野英司

第三年度予算表
(一九五四年(一九五五・三))

支出之部		収入之部	
事務通信費	4,000-	前年度繰越金	1,210-
会費発行費	10,000-	入会金	1,000-
遺贈対策基金	2000-	純会費	3,2000-
旅費補助費	20,000-	前年度未納金	7,400-
雑費	6,010-		
計	42,010-	計	42,010-

会計 平沢 勇

◎前年度会費大口未納者に寄ぐ未納金が収入の三割強を示している。会計の窮状を察し直ちに納入の意志消然を察まで申出られ直し。該意なき場合は会則第二十一條第三項により処分する。

LA MORAIN		1954.12.1-1955.4.10	
25	富士山	1954.12.1~3	田中(将) 鈴木
26	万座スキー	12.16~18	山口 笹田 鈴木
27	飯岳白萩川	12.18~25	田中(将)
28	赤倉スキー	12.26	田中(将)
29	白馬岳	12.20~30	平沢
30	細野スキー	12.26~30	山口
31	(19)万座スキー合宿	12.31~ 1955 1.6	平沢 山口 笹田 長崎 森沢 鈴木 成瀬 山中 岩崎 酒田 佐藤 小田 松田 米野 他2 西高部員5名
32	大穴石打スキー	1.15~16	田中(将) 平沢
33	岩原スキー	1.15~16	山中
34	岩原大穴スキー	1.15~16	鈴木
35	岩原石打スキー	1.15~17	松田
36	草津スキー	1.19~21	山口
37	蔵王スキー	1.22~23	鈴木 山中
38	草津スキー	1.30~31	中野
39	富士二合目スキー	2.13	山中 伊藤
40	飛騨スキー	2.18~25	山口
41	石打スキー	2.20	山中
42	日光湯本スキー	2.27	山中 龜山
43	飯岳西面	2.18~3.10	田中(将) 平沢
44	菅平スキー	2.23~2.27	佐藤
45	菅平スキー	2.28~3.5	加藤
46	野沢スキー	3.1~3.6	成瀬
47	戸倉三山	3.2	田中(実) 佐藤
48	五竜岳・霧ヶ岳	3.12~18	田中(将) 平沢

49	石打スキー	1.955. 3.4~6	松田(町田)
50	監取山	3.11~12	松田(町田)
51	八幡行跡(生活)	3.12~15	西本
52	(20) 八方尾根	3.17~23	山口 中野 山中 小田 他五名
53	(21) 第二又ハハ岳 五面合宿	3.30~4.3	田中(博) 田中(廣) 平沢 鈴木 高田 松田 町田 林
54	丹沢表尾根	4.8	中野(A)

編集後記

◎我々の会がどんな会であるか、山行を一見すれば判る。それほど行動は会の性質を表しているものである。その行動記録をせよとして考察記録こそ会員の生命であり使命であると云って決して過言ではない。

しかし、原稿のメ切に十日遅れようと一ヶ月遅れようと少しも躊躇しない会員がいるのであるから、馬鹿も休み休みにしてくれどとなりたくなる。編集子にしても人並に多忙であることに決りない。三月の八方尾根の報告は必ずしも除外せざるを得ない。

◎記録である以上パーティ全体の行動が一目でわからねはならないのだが、どの原稿も、それはかりでなく気象の記述なく、挨拶したルートにさえふれていないのだから校正するのに一苦労である。不参加者にも解る様は、紀行文にしてみらいたいものだ。

◎会報が不定期なためか会員からの自主的投稿が全くない。次号は七月一日発行六月十五日メ切とする。面白い原稿を期待する。

西朋報 告 界 六号

発行日 昭和廿年五月二十日

編集者 田中 博 利

発行者 西朋登高会

(中野区大和町一八〇 田中 方)